

10

スカート原型からみる作図様式と
体型の捉え方との関連The Relationship of the Pattern Design in Reality
to the Body Style Seen from the Viewpoint of the
Skirt Pattern

ファッション造形学科・教授
Department of Fashion Design・Professor

高間 由美子 Yumiko TAKAMA

ファッション造形学科・准教授
Department of Fashion Design・Associate Professor

木村 佳津子 Kaduko KIMURA

タイトとは『ぴったり合った』という意味で、フレアースカートなどに対し、ウエストから腰にかけてぴったりあったスカートの総称であり、スカートの基本でもある。スカートの歴史は、古代エジプト時代に四角い布を筒状にして腰で縛ったり、布を巻いて結んだりしたものが最も古いとされている。その後、13世紀になって、立体化の技術が発達しはじめると、ダーツを取って腰にフィットさせ、裾には歩行のための運動量を加えた着やすい形になった。20世紀初頭には日本にもスカートが入ってきたが、その間の形は社会情勢とともに変化していき、特にスカート丈の変化は時代を反映させた。

現在の着こなしとしてはスーツのスカートとして、あるいはブラウスやセーターとの組み合わせが一般的であり、誰にでも向く無難な形のスカートとして幅広い年齢層から支持を受けている。だが、この“タイトスカート”の名称は、日本のみで用いられている語でもある。

今シーズンは、このタイトスカートが若者にも好まれたようだ。シルエットには変化はないものの、丈はミニからマキシまでの種類があり、単純なデザインであるがゆえに着こなしに変化を持たせられたのが人気の理由だったのだろうか。また、素材によるデザイン・用途・季節感に応じた着こなしができることも大きな要因になったと考えられる。これらの点からいっても大切なアイテムのひとつであることに間違いはないだろう。

通販会社「S社」のネット販売は、図1のような単純なタイトスカートではあるが、さまざまなデザインのスカートが記載されていた。そこには素材や各部位の説明、着こなし方などを購入者に対してわかりやすいアドバイスがあった。つまり、実際に手にとって確かめられないのでわかりやすく、しかも購入しやすいよう細部にわたり工夫がしてあった。たとえば、“タイトシルエットでも窮屈感がなく座りシワの心配もなく自転車にもラクラク乗れる。裏地無しだから洗濯機もOK。サイド切り替えて細見え効果あり。ヒザが隠れる人気の丈感にも注目”という具合である。

このように、デザイン画から始まり、素材、材質の伸縮度、スカート丈の比較、洗濯の仕方、縫製、着こなし方まであらゆる角度から購入希望者の立場で解説を行うことで通信販売での不利な点を解消していた。タイトスカートは店頭、オーダー、通販などのよっても購入しやすいアイテムであった。

2 研究の目的

このようにタイトスカートのアイテムは多いが、シルエットにはほとんど変化はみられない。それが、タイトスカートの特徴であり、そのスカートを美しく着用することがスカートを際立たせるのであ



図1: カタログ通販「S社」のデザインとその説明図(2013年12月)

る。その美しさの基本は、ウエストからヒップまでの体のラインであり、体に沿わせながらも適度なゆりが必要となる。あとはデザインに応じた素材、丈であろう。そのためには、体型をよく観察し、特徴をつかむことが大切であり、特に採寸は重要課題になる。これらの条件を満たすようなパターン作図を行い、試着後の補正によるパターン完成を目指すのである。

ところで、これらのタイトスカートの一般的なパターンはどうなっているのだろうか。原型を調べると文化式をはじめ、ドレメ式、田中式などさまざまな様式があり、これらの数多くの原型は、サイズさえわかれば、誰にでも簡単に作図展開ができるようになっている。つまり、一般向きに作図方法が表記されているのである。しかし、それらの原型は、見た目には変化の違いがわからないものの、サイズの取り方、展開方法、手順に違いがみられ、作図の方法も異なっていた。同一サイズのパターンでありながら各様式の工夫や特徴があるのだろう。

そこで、本研究では、各種スカート原型の作図を通して、体型の捉え方、美しいシルエットの出し方などそれらのパターンの特徴を見出し、その関連性を検証する。また、パターンメイキングを学ぶ学生たちにとって、体型に合った作図を行う際、参考となるパターンの選び方を理解させたい。さらに我々が検証した中から新しいパターンを紹介することで今後に役立ててくれることを願う。

3 方法

3.1 作図

様式は文化式、ドレメ式、田中式、アミコ式、崎田式(FIT導入)の5種類に市販のパターン作図を加えた計6種類のタイトスカート

原型を使用した。それら6種類の作図を用い、トワールでタイトスカートを製作した。作図のサイズは9ARを基準としたW64、H91、腰丈18を用いた。S.Lはノーマルレングスの55cmとした。

3.2 試着

標準寸法の試作品6種類をボディに試着させた。その後、被験者に試着させ、それぞれの特徴と各試作品の比較検討を試みた。被験者のサイズはW64、H91、腰丈18であり、ボディチェックのボディは、9AR(ゆりみ入り)のボディでサイズはB87、W63、H93であった。

3.3 観察

まず、製作したタイトスカートをボディ着装し、同一ボディによる観察を試みた。その後、スカートを被験者に着用させた。適正なWとHゆりみ、ウエストライン、ダーツの位置・分量・方向、脇線の様子、水平な裾線の確保などのチェックをした。さらに、日常生活を妨げない形態の保持、シルエットの美しさなどもチェック項目に加えた。なお、ボディ着装では客観的評価を、被験者着用では着装評価をも求めた。

4 考察および結果

4.1 ボディ 着装の結果

図2のボディ着装A～Fは、同一ボディの原型比較である。たとえば、正面からみた場合、ダーツの位置・向き・長さ、ダーツの様子などを検証する。ただ、残念なことは、ベルト付けの際にベルト芯を使用しなかったため、ベルト自体に斜めじわが出たことである。



図2: ボディ 着装A～F(前)



前



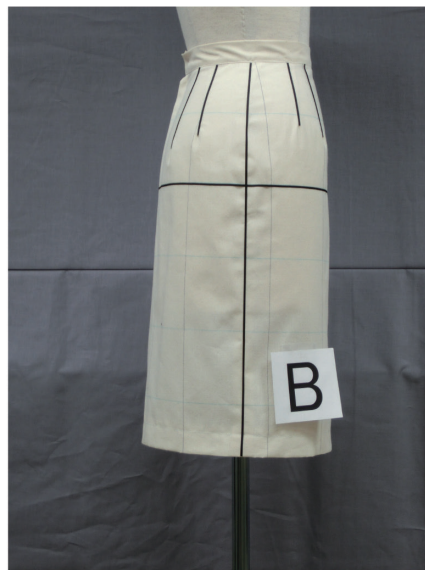
横



後



前



横



後



前



横



後

図3:各様式によるボディ 着装



前



横



後



前



横



後



前



横



後

図4:各様式によるボディ着装

図3、図4の6種類の着装の中では、Aが一番美しかった。もちろん総合的評価のため、部分的にはしわが出ていた箇所もあるが、概ね良好であった。

最下位はCの着装であった。前後身頃ともに、ウエストからヒップ辺りの腰の丸みにダーツが沿わず、美しいシルエットには至ら

なかった。側面からも腰の丸みに沿わなく、しわが目立った。後身頃はきれいであったが、後ウエストラインの引っ張りが強いのか側面から見ると後中心のつれじわが目立った。

次に、図5のボディ着装の評価が高かったA、図6の最下位だったCの被験者着用を比較した。

Hのゆとり不足、ダーツの位置が脇よりのため、お腹のふくらみに合っていない



横からみてもダーツの方向にふくらみが合っていない事が分かる



図5: ボディ着装で評価の高かったAの被験者の試着

ダーツ先が体型に合っていない



後の腰のふくらみに引っ張られている

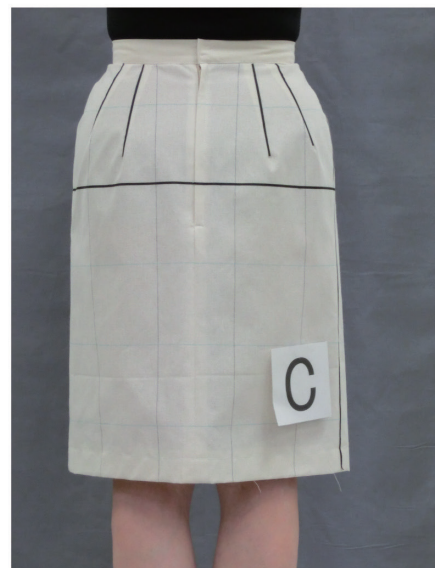
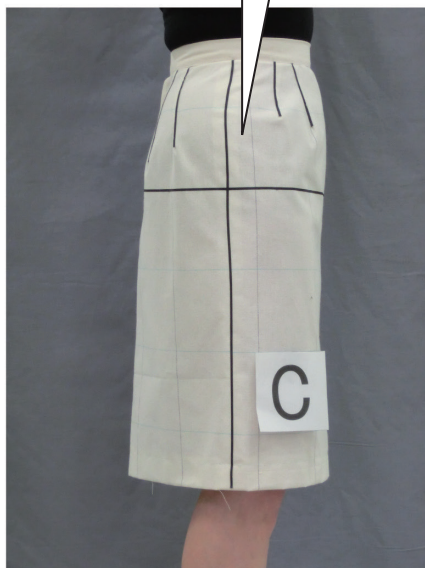


図6: ボディ着装で評価の低かったCでの被験者の試着

そこで、筆者たちの評価を客観的評価とし、表1にまとめた。それを点数化したものが表2である。その結果、一番きれいにフィットした着装は、前述のようにAであった。それ以下はE、B、F、D、Cの順であった。

これから、ボディ着装と被験者の評価から、同一サイズのパターン作図とは言え、これだけの違いが出るとは驚きであった。

表1: 作図比較による着装評価表

タイトスカート評価(ボディ着装に場合)

位置 種類	前方	横方	後方	全体的	作図様式(◆)の特徴と結果
A	◆ 2本のダーツが脇寄り過ぎのためお腹のあたりが広くみえた	◆ 前後ダーツが脇線に寄り過ぎていた	◆ BWあたりのゆとり不足 ◆ CBのはね ◆ 後中心辺りのウエストラインが下がり気味であった		◆ Wラインのくり下げは1cm
B		◆ 脇ダーツの分量が多くトワルの水平線が脇で下がった ◆ 後Wのゆとり不足 ◆ W位置したが前に引っ張られていた		◆ MHのゆとり不足	◆ ダーツ位置の指定はなく、必要と思われるところにダーツをとる作図方法であった ◆ Fダーツ2.8cm、Bダーツ2.8cm ◆ W64cmの上りに対してF32cm(いせ1cm) B32cm(いせ1cm)
C	◆ ダーツの長さ不足 ◆ ダーツ先のくぼみが気になる	◆ 脇線のゆがみ ◆ HLからWLの脇線が前へ引張られていた	◆ CBのはね ◆ ダーツのゆがみ(寸法不足)	◆ H寸法のゆとり不足 ◆ W寸法のゆとり不足	◆ H94cmの上りであった ◆ W64cmの上りに、いせが2cm
D	◆ ダーツ分量に比べ長さ不足のダーツ ◆ 腰のふくらみにダーツが合っていなかった	◆ 脇線の不自然なカーブ	◆ WL下からHLにかけてのシルエットのゆがみ		
E			◆ 後ろの2本ダーツの長さが同寸で気になった ◆ 2本のダーツの方向と直線的であったことが気になった		◆ ダーツはカーブの作図であった
F	◆ ダーツ分量が多いのかふくらみ過ぎていた ◆ ダーツが1本のためか脇カーブがきつかった		◆ 後ダーツのふくらみが目立った ◆ CBのはね ◆ 後ダーツが中心に寄り過ぎ ◆ H寸法のゆとり多くみえた	◆ MHのゆるみ多かった ◆ H寸法のゆとり多かった	◆ ダーツはカーブの作図であった ◆ Fダーツ3.3cm、Bダーツ3.4cm ◆ H97cmの上りであった

表2: 表1 評価による点数化の順位表

タイトスカート評価(ボディ着装での点数化)

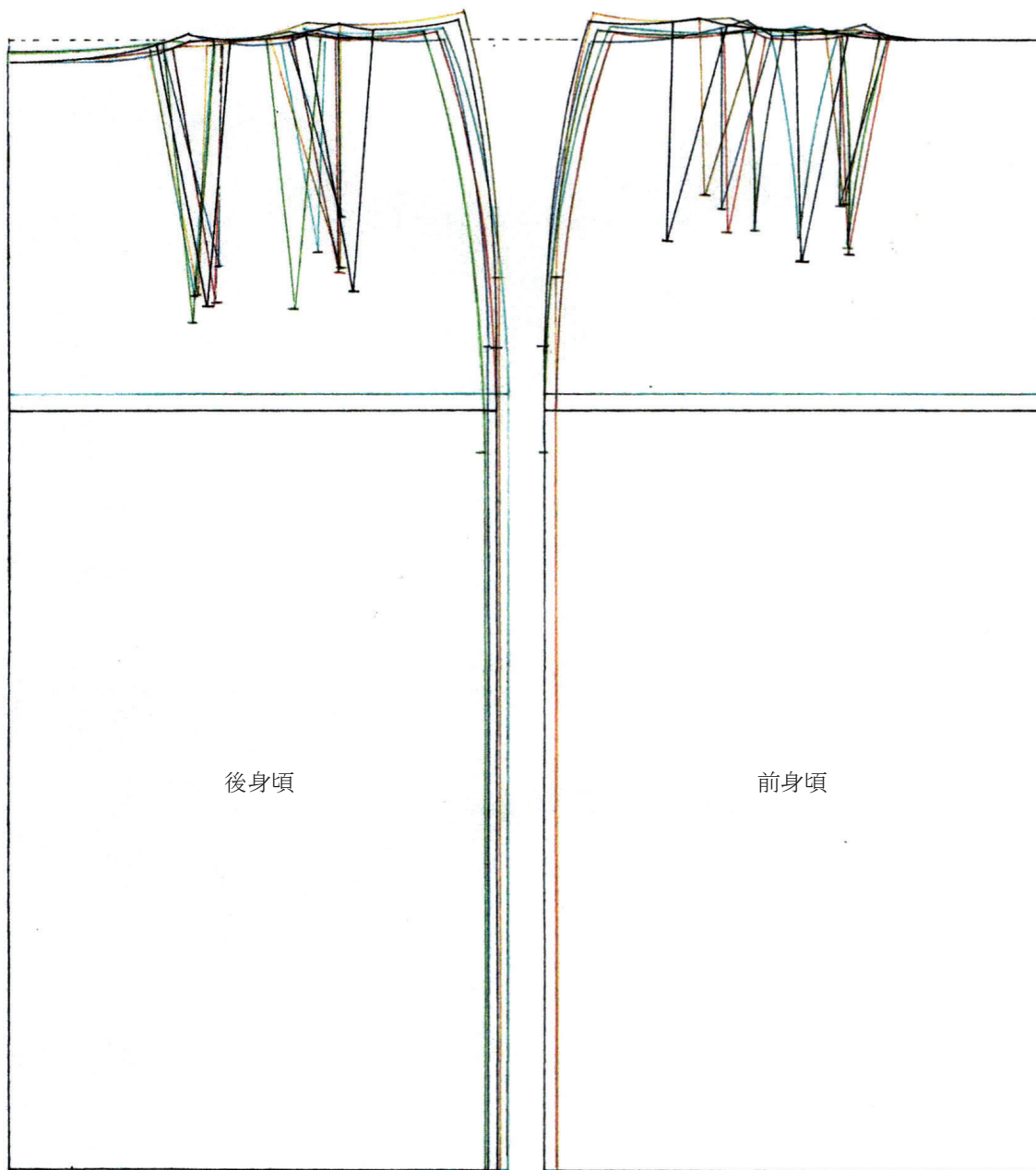
位置 種類	前評価	脇評価	後評価	合計	順位
A	8	10	8	26	1
B	6	2	10	18	3
C	4	0	0	4	6
D	0	4	4	8	5
E	10	8	6	24	2
F	2	6	2	10	4

表1の作図比較による着装評価表と表2の点数化の順位表の結果を以下にまとめる。

- ①W寸法は布の厚み分量を考慮し、1～2cmのゆとり分量が必要であることがわかった。
- ②H寸法のゆとりには、4～5cmのゆとりがちょうど良かった。
- ③前身頃のMHをカバーするため、イセとカーブダーツが相応しいことがわかった。
- ④脇側ダーツ分量が多すぎるとダーツ先のふくらみが大きくなり、H寸法が必要以上に大きくみえるので、脇側ダーツの分量と長さのバランスには注意しなければならないことがわかった。

- ⑤最近はいせ処理をするパターンは少なくなってきたが、BとCは前後にイセ分量が1～2cmあったので体型カバーには役立っていた。しかし、トワル地でのイセ分量ではやや多い感もあり、ウエスト下のイセが目立ったことは考慮しなければならない。
- ⑥Hサイズ91cmでありながら、ゆとり分量はさまざまであったことからサイズに対して、ゆるみ具合がわかりにくかった。
- ⑦各様式の体型の捉え方はさまざまであり、特に、ダーツの取り方については著しい違いがみられた。
- ⑧各様式の作図からは、ボディシルエットの結果はまあまあであったが、被験者の体型の欠点をカバーするまでには至らなかった。

4.2 ボディ着装のパターン作図



A ————— D —————
 B ————— E —————
 C ————— F —————

図7:A~Fの作図比較

次に、図7のように6種類すべてを重ね、それぞれの違いを確認した。後身頃の中側のダーツ分量・位置・長さには各種ともに変化は少なかったが、後身頃の脇側ダーツでは著しく違いがみられた。このことから、脇側のダーツは腰のふくらみに影響するため、分量・長さ・方向、位置には特に慎重に選ばなければならない。

また、前身頃中側ダーツ、脇側ダーツでは、それぞれの部位のためのダーツでありながら、ダーツの役目がはっきりしなかった。

体型には、たとえば、ウエストとヒップの差がなく寸胴な人、ウエストは標準だが肉付きがよくMHあたりが突出している人、逆に標

準より肉付きの少ない人、お腹の出ている人、ヒップサイズより大腿部が太い人など数限りない個人差がある。しかし、選んだパターンに対しては体型に対応させることは難しく、一般には着用者のサイズを当てはめることにとどまり、理想的なフィット感を得るのは困難である。

4.3 6種類のタイトスカートのダーツ比較

表3は作図パターンの寸法比較表である。それらを個々の数字から考察してみた。さらに、その寸法比較を図8～図15のグラフで示し、検証した。

表3: 作図パターンの寸法比較表(サイズ:W64cm・H91cm・腰丈18cm) (単位mm/度)

位置 方式	ゆとり量				ウエストライン			身頃ダーツ								脇ダーツ			
	H		W		前	後	横	種類 位置	分量		長さ		方向(角度)		分量		長さ	脇丈 (W~H)	
	仕上	ゆるみ	仕上	ゆるみ					F	B	F	B	F	B	F	B			
A	960	50	650	10	0	10	10	中側	25	35	114	130	99	101	20	20	150	191	
B	950	40	640	0 (イセ20)	0	10	5	中側	23	23	107	123	101	100	28	28	180	189	
								脇側	20	20	98	111	100	99					
C	940	30	640	0	0	10	15	中側	25	25	85	120	100	102	20	15	116	196	
								脇側	25	30	84	115	105	108					
D	950	40	660	20	0	10	0	中側	23	28	83	104	106	105	24	22	150	183	
								脇側	23	23	86	85	105	105					
E	950	40	660	20	0	5	5	中側	21	26	105	138	105	95	27	29	200	189	
								脇側	19	25	98	133	97	96					
F	970	60	660	20 (イセ10)	0	8	7	中側	32	31	102	123	101	100	33	34	180	184	
								脇側	23	23	104	104	99	99					

4.4 表3の作図パターンの寸法比較表からみたグラフ比較

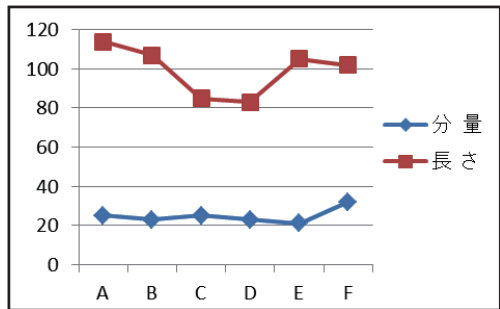


図8: 中側ダーツ(前)の分量と長さ

分量の変化は少ないが長さへの違いは著しかった。特に、Aは最も長く、ついでB、E、F、の順でC、Dは最も短かった。ダーツ分量の誤差が少なく、長さの違いがみられたのはC、Dの作図はお腹のふくらみが多く出る結果になった。

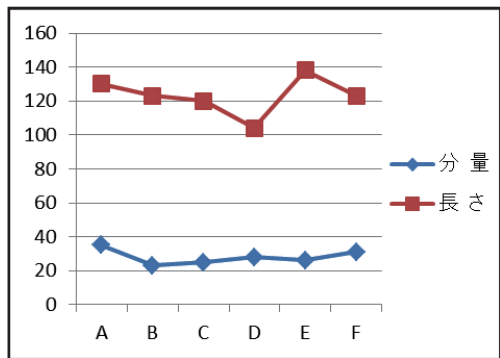


図9: 中側ダーツ(後)の分量と長さ

分量はAが35と最も多く、次いでF、D、E、C、Bの順になった。長さはEが最も長く、次でA、BとFは同じ長さで、C、Dの順になった。これは、Eのダーツは長いいためヒップのふくらみが下がり気味になる。また、Dダーツは短いいためヒップのふくらみが上の方になった。

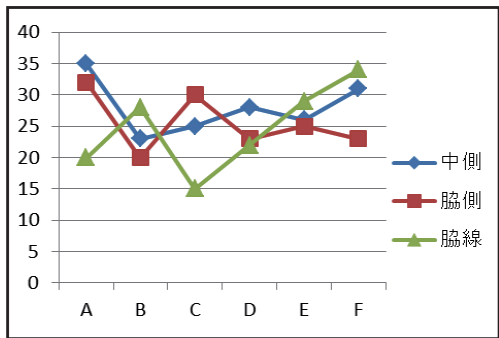


図10: 後身頃ダーツの分量比較

Aは中側と脇側の分量に対して脇線ダーツ分量が少なかった。これは後身頃の腰のふくらみを重視し脇線では少ないふくらみになっていたことがわかる。Fは中側と脇線の分量は多く取り、脇側は少ないことからヒップの辺りと腰のラインに多くのふくらみを取ってしながら脇側では少ない分量の丸みを取っていたことがわかる。CはAに似ているが脇側の分量が最も多いことから脇より腰のふくらみが多い人をイメージしていたことがわかる。

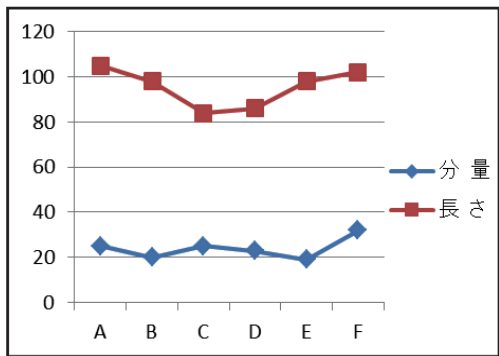


図11: 脇側ダーツ(前)の分量と長さ

脇側のダーツは、いわゆる脇線であり、腰のふくらみに影響を与える。C、Dは最も短いため腰のふくらみに張りが出ていたことになる。Fダーツは分量が多く長さもわりと長いので、バランス的には悪くないと思われた。

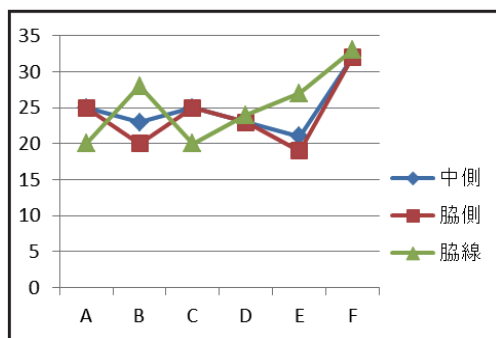


図12:前身頃ダーツの分量比較

前身頃ダーツの分量は、DもFも3本のダーツ分量はほぼ同量ではあったが、Dの分量に比べ、Fは分量が多いので丸みが出過ぎる可能性がある。AとCは、脇線のダーツが最も少なかったので脇線のシルエットは美しいように思われた。

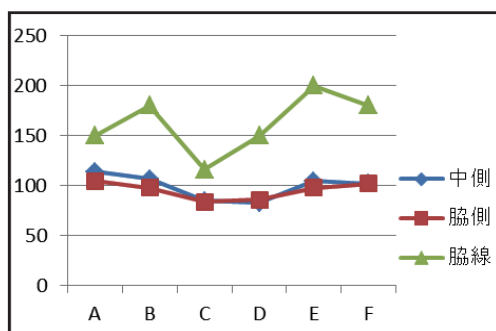


図13:前身頃ダーツの長さ比較

中側と脇側の2本のダーツ長さは各様式ともほぼ変わらなかったが、B、E、Fの脇線ダーツが長く、脇線のシルエットは美しいと考えられる。

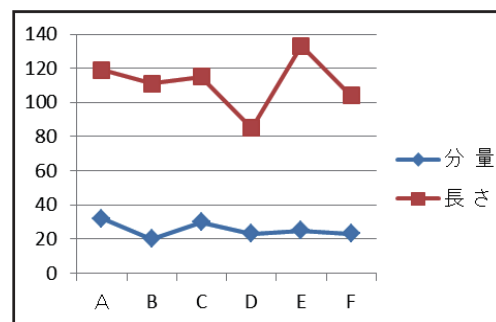


図14:脇側ダーツ(後)の分量と長さ

Dのダーツの長さが極端に短いことから他のダーツに比べ太短くなり、シルエットは美しく出ないと考えられる。

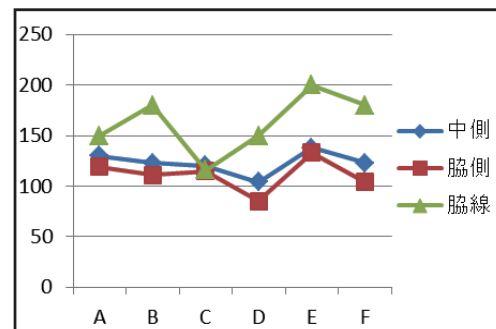


図15:後身頃ダーツの長さ比較

Cは3本ともに違いがみられなかったことに特徴がみられた。また、6種類ともに中側、脇側に違いは少なかった。

5 作図比較のまとめ

筆者たちは、この研究を通して、各種原型の差異に驚かされた。なぜならば、タイトスカートの作図は、サイズさえわかれば誰にでも手軽にパターン化できると考えていたからである。もちろん、体型は人それぞれに特徴があり、その特徴を捉えることで、その後のパターン作図の補正が少なくなることは言うまでもないだろう。

今回の比較検討を通して、改めてわかったことも多くあった。

- ①人体の突出部はHだけでなくお腹周りのMHの採寸も重要である。
- ②タイトスカート6種類の作図からは、同じサイズにもかかわらず、ゆるみ、ダーツ分量・方向・長さ、ウエストラインの位置からは

様々な違いがみられた。体型を捉えた作図のはずが固定化には至らなかった。

- ③ウエストのゆるみは1~2cm、Hでは4~5cmのゆるみが適当であったことが確認できた。また、体型の丸みを表す方法としては、ウエスト下のイセとダーツのカーブが有効であったこともわかった。
- ④作図を選ぶときは、サイズだけを鵜呑みにしないで着用者の特徴をよく観察することが重要であり、各様式については万人向きであって、あくまでも基本であることを忘れてはならない。
- ⑤体型の観察後、作図の手直しを理解したうえで取り掛かるか、または指導者から補正について適切なアドバイスを受けるのが望ましい。
- ⑥タイトスカートに相応しい素材選びが、体型にあったシルエットや体型カバーに役立つことで美しいシルエットが可能になる。

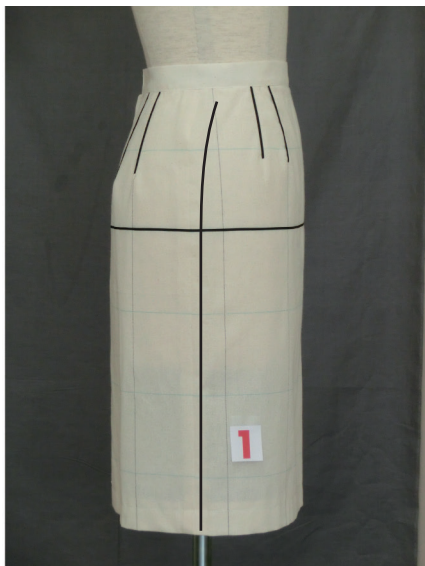
6 タイトスカートパターンの提案

6.1 作図比較から得られたパターン I

そこで、これまでの比較検討した結果を踏まえ、得られた数値を使用し、新たなスカート制作を試みた。これにより、図16、17のようなボディ、被験者に合ったパターンが得られた。



前



横

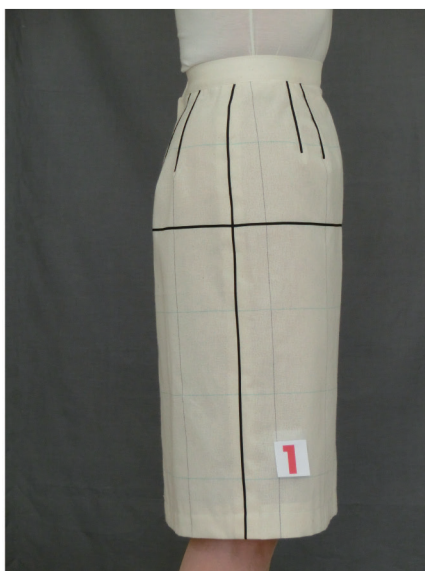


後

図16:補正後の試作スカートによるボディ 着装



前



横



後

図17:試作スカート図16の被験者着用の状態

6.2 これまでの研究の結果から得られた独自のパターン提案

図20のように、人体下半身を筒状に覆った状態を基本立体とした。この柱面体は前では腹部や大腿部、斜面では腸骨棘や大腿部、側面では体側線の突出点、後方では臀部などに接した突出点によって中空部分となる。その中空部分を体に沿わせることで美しいシルエットが作り出される。それがダーツである。スカートの基本立体がもつ曲面は人体下半身の突出部であり、下方は垂直な柱面である。



図20: タイトスカートの基本立体

その中空と柱面が図21であり、ウエストラインからヒップラインにかけての体表曲面である。つまり、この体表曲面をいかに沿わせるかでシルエットが決まる。その手法は、ゆるみであり、ダーツの数・分量・長さ・向きであり、イセであったりする。体の特徴である曲面に適合させることが大切である。そこで、我々は、その曲面を作り出す手法のひとつとして図22のようにドレーピングを試みた。

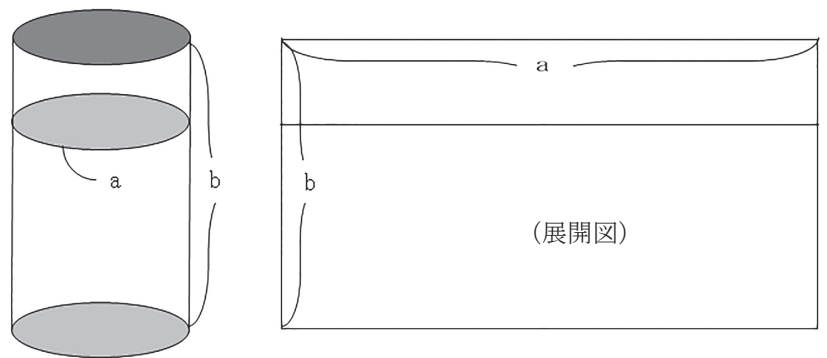


図21: 柱面体とその展開図



前



後

図22: ドレーピングの様子

6.3 ドレーピング後の試作品Ⅱ

ドレーピング後に、その立体結果と平面作図を併用しながらパターン作図を行った。立体の持つ形状を平面作図に応用した。ボディは各社によって特徴が異なるが一般向きサイズとして完成された人台でもある。しかし、ボディはあくまでも人体の仮の姿と捉え、ここでは日本人女性JISサイズの一般向きを想定し、作図を試みた。そのパターン提案Ⅱのボディ着装が図23、同一パターン提案の被験者着装が図24である。



前



横



後

図23: パターン提案Ⅱのボディ着装



前



横



後

図24: パターン提案Ⅱの被験者着装

6.4 試作品Ⅱのパターン提案

図25のパターンは図16、図17のパターンⅠと図23、図24のパターンⅡの違いを比較したものである。後身頃は中側ダーツには差異はみられず、脇側ダーツは脇へ0.5cmの移動があった。前身頃の中側ダーツは脇へ0.6cmの移動にダーツ分量0.3cmの増加があった。また、脇側ダーツにおいては脇へ1.6cmの移動がみられ、ダーツ分量0.6cmの増加による脇出しがあった。このようなことから、ボディでは肉付きが少なく、お腹のふくらみや臀部の突出部が人体より控えられているために、ボディでのチェックから人体へのチェック移行での比較は難しい。よりリアルなボディを求めるならば補正を行ってからの使用が望ましいが、一般向きとなると

そこまでの補正が必要であろうか。パターン作図時に、人体観察を行い補正が少なくなるよう予め修正を行ったほうが、わかりやすく便利ではないだろうか。

これまで、我々が検証してきたことは、各種パターンの比較であった。そのことは前述したように、ダーツの捉え方に違いがあり、パターン選択に戸迷う結果となった。つまり、各種パターンの差異の固定化が好ましいと考えられる。そこで、図26パターンⅡの作図は、さまざまな体型に対応できるパターンとして提案する。

今後はこのパターンを使用し、個人差に対応したタイトスカートの検証が必要となる。

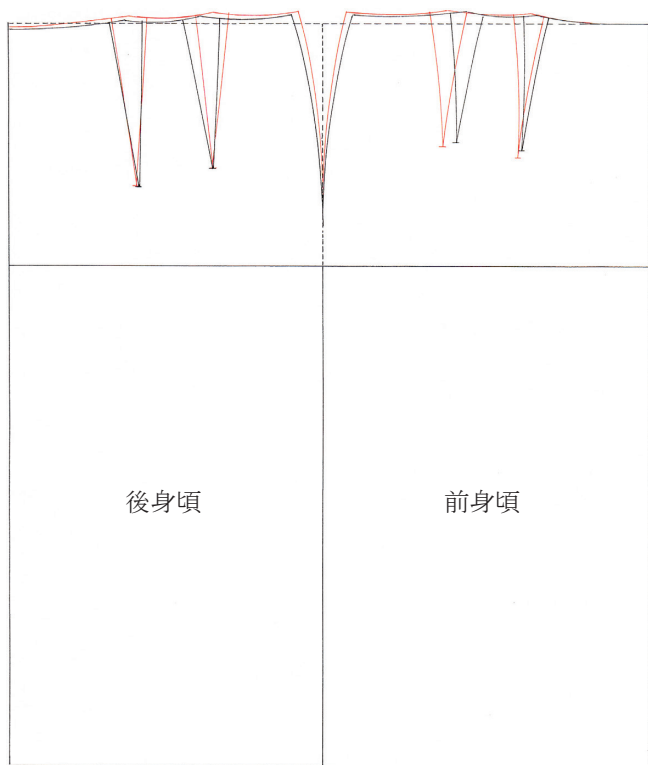


図25: 作図比較から得られたパターンⅠ(黒ライン)と補正後のパターンⅡ(赤ライン)の比較

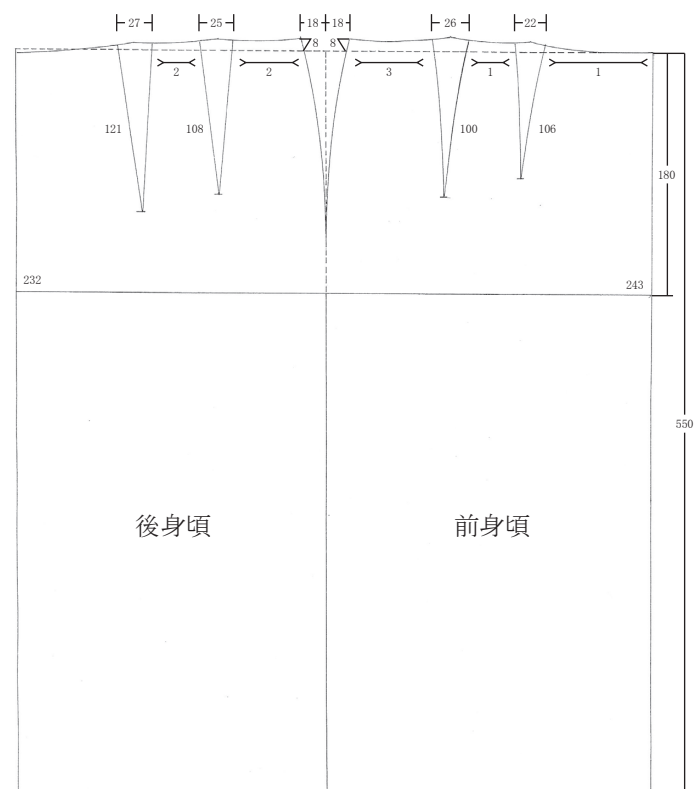


図26: パターンⅡの作図

参考文献

- [1] 田中千代、『新・田中千代服飾辞典』、同文書院、1991
- [2] 三吉満智子、『服装造形学 理論編Ⅰ』、文化出版局、2005
- [3] 中屋紀子・三吉満智子、『服装造形学 技術編Ⅰ』、文化出版局、2009
- [4] 大野順之助、『パターンメイキングの原理』、(株)アミコファッションズ、1990
- [5] 崎田喜美枝、『パターンメイキングとグレーディングテクニック』、関西女子美術短期大学出版局、1981

